

倶知安町 高山農場の経営概要と麦作り

1 市町村の概要

倶知安町は北海道西部の後志地方にあり、南に羊蹄山、西にニセコ連峰がある小盆地に位置しています。

冬は年間平均10mの降雪量と2m弱の最深積雪を観測するなど、日本でも有数の豪雪地帯で、近年ではスキーなどを目的とした国外からの観光客が多数訪れています。

春から夏にかけては温暖で晴天な日が多く、古くからばれいしょの産地として知られており、ばれいしょをはじめ小麦、豆類、てんさいなどを栽培する畑作経営を中心とした農業が盛んです。



高山和男さん

2 高山農場の経営概要

家族構成	経営規模		左の内借地面積	輪作体系					輪作の特徴
	水田	畑		平28	平29	平30	令元	令2	
総人員2人 稼働人員1人	3.2ha	11.9ha	0ha	ばれいしょ	小豆 秋小麦	てんさい	ばれいしょ	秋小麦 小豆	畑作4品による3年輪作だが、秋まき小麦と小豆は6年に1度の作付となっている
	合計 15.1ha		0ha						

高山農場の作付構成

作物名	作付面積 (ha)
秋まき小麦	1.95
ばれいしょ	3.95
てんさい	3.81
小豆	2.09
水稲	3.22
その他	0.12
合計	15.1

高山農場は経営面積約15ha、倶知安町八幡地区で秋まき小麦、ばれいしょ、てんさい、小豆、水稲を作付けする、畑作・水稲の複合経営を営んでいます。

現在は高山さん1名で農場を運営していますが、繁忙期には雇用労働力や近隣農家との共同作業や作業委託等を活用し、余裕のある営農を行っています。

3 秋まき小麦の生産状況

最近3か年の秋まき小麦生産状況

年産	小麦品種名	小麦栽培面積 (ha)	麦作率 (%)	10a当たり収量 (kg)		上位等級生産量 (kg)	左の等級別検査数量 (kg)		規格外を含む総収量 (kg)	総収量対1~2等麦比率 (%)
				農家	統情		1等	2等		
平成30年	きたほなみ	1.93	12.7	384	268	7,413	7,413	0	8,964	83%
令和元年	きたほなみ	2.12	14.0	866	653	18,353	18,353	0	18,690	98%
平均		2.00	13.2	657	461	13,140	13,140	0	14,280	92%
令和2年	きたほなみ	1.95	12.9	701	446*	13,661	13,661	0	15,186	90%

*令和2年産の10当たり収量（統情）は、過去7年間の町平均から豊凶2カ年を除いた5カ年平均収量

品質等測定値（JA ようてい）

容積重 (g/ℓ)	F. N(sec)	蛋白 (%)	灰分 (%)
857	383	11.2	1.33

過去2ヶ年の10a当たり収量は、町平均に対して132～143%と高水準を確保しています。

平成30年は気象の影響により細麦傾向となり、規格外の割合が例年より増加しましたが、それでも10a当たり収量は町平均を超えています。

4 技術の内容

融雪促進		融雪期 (月/日)	は種			土性	施肥 (kg/10a)				
時期 (月/日)	資材・散布量		期 (月/日)	量 (kg/10a)	方法		区分	窒素	リン酸	加里	時期 (月/日)
3/8	スノーメルト 特号 (40kg/10a)	4/9	9/9	10.0	ドリルは種 畦幅12.5cm	火山性土	基肥	15.4	10.5	4.2	9/9
							追肥	8.4			4/17
							〃	4.2			5/14

除草剤散布		病虫害防除（植物成長調整剤等）			
時期 (月/日)	剤名・散布量	対象病虫害名	時期 (月/日)	使用薬剤・散布量	
9/10	ガレス乳剤 250ml/10a	雪腐病 (へり防除)	11/7	モンカットベフランフロアブル	4倍
				ランマンフロアブル	8倍
5/22	MCPソーダ塩 250g/10a	赤かび病 アブラムシ	6/14	シルバキュアフロアブル	2,000倍
				エルサン乳剤	1,000倍
		赤かび病 アブラムシ	6/22	ベフトップジンフロアブル	800倍
				ゲットアウトWDG	3,000倍
		赤かび病 アブラムシ	7/1	シルバキュアフロアブル	2,000倍
				ペイオフME液剤	2,000倍
		赤かび病 アブラムシ	7/10	チルト乳剤	2,000倍
				バイスロイド乳剤	2,000倍

5 技術の特色

(1) 排水対策とは種

暗渠の計画的整備と明渠施工を徹底し、春の植付前や秋まき小麦のは種前には心土破碎を実施するなど、排水対策に万全を期しています。また、各作物の収穫後には積雪前に必ずサブソイラを施工しています。

近年は秋にプラウ耕を施工して、春の土壌物理性向上に努めています。

(2) 輪作体系

畑作物は秋まき小麦の他にばれいしょ、てんさい、小豆を作付けしていますが、秋まき小麦と小豆は6年に1度の作付となるようローテーションを組んでおり、土壌病害の回避を実現しています。

(3) 土壌分析に基づく施肥と土づくり

定期的に土壌診断を実施し、分析結果を参考に、ほ場の特徴も考慮して施肥を行っています。融雪後すぐに追肥が行えないほ場もあるため、近年は緩効性の基肥を使用しています。

堆肥は施用していませんが、その分緑肥による土づくりを行っています。緑肥栽培にはこだわりを持って取り組んでおり、小麦収穫後には自家採種している長稈で乾物量の多いえんばく「モイワ（昭和48年北農試育成）」を栽培しています。

(4) は種

は種はばれいしょ収穫後、「サブソイラ→スタブルカルチ→ロータリー（1回）→グレンドリルによるは種」の手順で行っています。ロータリーのかごローラーはバネを強めに設定し、グレンドリルが沈み込まないように工夫しています。

は種時期とは種量は起生期に十分な生育量を確保できるように決めています。

(5) 融雪促進

地域の中でもかなり早い時期に融雪剤散布を行い、なるべく早く小麦が起生するように融雪促進に努めています。

(6) 生育を観察しながらの追肥

融雪後は生育状況を確認しながら、ほ場条件を鑑みて追肥を行っています。遅れ穂が出ないよう、起生期の茎数が少ない場合は後半の追肥を控えるようにしています。

6 経営上の特徴・工夫など

(1) 労働力の確保

前述のとおり雇用労働力（時期により2～4名を雇用）や近隣農家との共同作業によって、繁忙期（てんさい移植、ばれいしょ種いも切りや収穫、田植えなど）においても無理なく適期作業が行える体制をとっています（以前は秋まき小麦のは種・収穫作業を地区の大規模法人に委託していた時期もあったとのこと）。

また、小麦の雪腐病防除や水稻の防除についてはへり防除を委託し、省力化を図っています。

(2) コスト低減の取り組み

機械類は可能な限り自分で整備を行い、また、早目にメンテナンスをすることで耐用年数を延ばし、コストを下げるよう心がけています。

また、肥料も単価を比較して銘柄を選ぶなど、肥料費の低減に努めています。

執筆者名：後志農業改良普及センター 地域第一係長 熊谷 健一
JAようてい 第3ブロック営農推進センター 辻口 満之